

ドライバーの運転意識とヒヤリ・ハット体験との関連に関する調査研究（Ⅲ）（平成 8 年度）

交通事故の発生の裏には多くのヒヤリ・ハット体験が存在し、ヒヤリ・ハット体験を無くすることが事故防止のキーポイントとなっている。このため、ドライバーの運転意識とヒヤリ・ハットを体験した運転場面及びこれらの相互の関連について、3 カ年計画で調査を研究実施しており、初年度の高齢運転者、昨年度の若年運転者に続き、平成 8 年度は一般運転者を対象とした。

- ① 運転免許を保有する男女 5,000 名（回答者 2,601 名）にアンケートを行った。運転意識に関する 2 つの設問で肯定比率が多い項目は、「運転に危険はつきものである」(86.4%)、「どんな運転者でもヒヤリとすることはよくある」(83.1%)、「前の車もたもたしていると、腹がたつ」(62.8%)「歩行者や自転車をじゃまに思う」(44.2%)、「10 キロ程度のスピードオーバーであれば危険はない」(43.9%)であった。
- ② これらの設問に因子分析を適用して、攻撃的傾向、漫然・脇見運転傾向、違反容認傾向、運転への価値傾斜傾向、危険容認傾向、依存的傾向の 6 因子に要約してみると、攻撃的傾向、漫然・脇見運転傾向、違反容認傾向は男性と若年層に、運転への価値傾斜傾向は若年層と男性高齢層で強くなっている。事故違反については、攻撃的傾向と漫然・脇見運転ではほとんどの層で、違反容認傾向と依存的傾向は半分程度の層で関連が認められる。
- ③ ヒヤリ・ハット体験に関する 15 の設問項目では、15 項目のいずれかの体験のある者の比率は 86.9%で、男性、若年層で高い。また事故違反者は、ヒヤリ・ハット体験 15 項目中 13 項目の比率が高く、若年層ほど顕著である。また、運転意識との関連でみると、意識因子が強い運転者のヒヤリ・ハット体験者比率がもっとも高い（表）。
- ④ 運転中に電話を使用することがある運転者のうち、電話中のヒヤリ・ハット体験者比率は 27%、カーナビを装備している運転者のうちカーナビ使用中のヒヤリ・ハット体験者比率は 31%であった。
- ⑤ 今後は、ヒヤリ・ハット体験を活用した運転者教育教材の作成、運転意識に応じた交通安全教育、ヒヤリ・ハット体験をなくするための交通安全教育、ヒヤリ・ハット体験についての総合的な研究と、ヒヤリ・ハット体験に基づく事故防止のノウハウのマニュアル化が望まれる。

表 運転意識別にみた 15 項目のヒヤリ・ハット体験者比率の平均 (%)

	意識因子の傾向		
	強	中	弱
攻撃的傾向	32.9	28.0	22.1
漫然・脇見運転傾向	35.4	26.6	21.0
違反容認傾向	30.2	27.7	25.2
運転への価値傾斜傾向	29.8	27.3	26.0
危険容認傾向	28.9	28.2	26.0
依存的傾向	31.6	26.7	24.9